

2022年1-3月

20220105

かなり旧聞になるが、昨年末に二つのオンライン研究会を聴講した。

①東京女子大学丸山眞男文庫公開講演会：都築勉『おのがデモンに聞け——小野塚・吉野・南原・丸山・京極の政治学』合評会（元来は2021年10月23日に行なわれたものだが、YouTubeで限定公開されたため、大分経ってから聞いた）。

②マックス・ヴェーバー没後百年シンポジウム「学知の危機とマックス・ヴェーバー——科学主義と反知性主義を超える」（2021年12月19日）。

①は千葉眞、谷口将紀、伏見岳人という3人の書評報告、都築勉のリプライ、そして渡辺浩をまじえた総合討論という形で進められた。都築著を読んだときの感想は以前に書いたことがある（20210325）。そこにも書いたように、私自身は「政治学者」というアイデンティティをあまりはっきりと持っていないのだが、合評会の発言者たちは、それぞれに発想を異にしつつも、政治学という学問分野を第一義におくという点では共通しているように感じた。もう一つの共通点として、大なり小なり丸山眞男と距離を置き、現在の若い世代の政治学者にとって丸山は共通教養ではなくなっているという指摘があった。私自身はもともと「丸山政治学」の系譜を引く人間ではなく、現在の若い世代の政治学者が丸山をどう見ているかはさしたる関心事ではないが、戦後日本思想史の一コマとして丸山の軌跡にはそれなりの関心がある。その関連で、当日の渡辺発言の中で南原と丸山の関係に触れた箇所は特に興味深かった。

②マックス・ヴェーバー没後百年に関連して、ここ一、二年大量のウェーバー論が出たが、このシンポジウムはそれらの中で特異な位置を占めているように感じた。近年続けざまに出た各種ウェーバー論のうち、野口雅弘、今野元、中野敏男、佐藤俊樹の作品は、内容的には大きく異なるにもせよ、広く非専門家にも呼びかけようとする性格で共通するところがあり、特に前2者は政治学会大会のラウンドテーブルでも取り上げられるなど、広い反響があった。これに対して、今回のシンポジウムは思想史プロパーの専門家たち向けの企画のような印象を受けた。それだけに、社会思想史・経済思想史・法思想史などの専門家たちの関心も高かったようで、水林彪、中野敏男といった長老級研究者をはじめ、最大時に130人近い人が参加していたようだった。当日の3つの報告は、ウェーバー自身ではなく関連する他の思想家たちを主題として、彼らとの対比でウェーバーの特徴を浮かび上がらせようとしていた。具体的には、内藤葉子がマリアンネ・ヴェーバー、橋本直人がシュタムラー、太子堂正称がハイエクを取り上げた。三笥利幸、野崎敏郎という2人のコメンテーターと企画趣旨を説明した恒木健太郎がこれら3者とウェーバー自身を結びつけるという構成だった。

私自身はマリアンネにもシュタムラーにも通じていないので、最初の二報告は十分咀嚼できなかったが、太子堂報告で論じられたハイエクについてはそれなりの馴染みがあった。手前味噌になるが、20年以上前に出した拙著『現存した社会主義——リヴァイアサンの素顔』（勁草書房、1999年）で、ハイエクに必死で取り組み、自己流の見解として、ハイエクの議論は1990年代に旧ソ連・東欧圏で進められた「上からの市場経済化」を正当化するものではなく、むしろそれに反するものではないかという展望を仮説的に提起したこと

がある。このような我流の議論がどこまで通用するか不安だったが、ハイエク専門家の一人である渡辺幹雄氏が『ハイエクと現代リベラリズム——「アンチ合理主義的リベラリズム」の展開』（春秋社、2006年）の「付章二」で拙著を取り上げて、塩川のハイエク理解は「ハイエクにグローバリゼーション、ネオ・リベラリズム、はたまた市場原理主義の咎を帰して喜んでいる能天気な学者もどき」よりも優れているという評価を示してくれたことには大いに勇気づけられた。今回のシンポジウムにおける太子堂報告も、ハイエクはいわゆる新自由主義者ではないと論じるもので、私としては我が意を得たりという感じで聞いた。当日の反応として、これは非常に新しい見解で驚いたという感じの発言があったが、私はむしろかねてからの持説が裏付けられたという感想をいただいた。

それはともかく、多岐にわたるシンポジウムの発言の中で比較的多くの人に共有される問題意識として、「科学主義」と「反知性主義」の問題があった。ここで「科学主義」という言葉はむしろ「科学信仰」とも言い換えられるものを指しており、科学の限界に無自覚なまま「科学的」発想を不当に拡張適用し、人種や性別に関する偏見を「科学的に」裏付けようとする態度であり、それはむしろ「反知性主義」だというのが企画者の趣旨だったらしい。この問題提起自体にはうなずけるものがあるが、それを言いたいのであれば、もっと他の形での企画でもよかったのではないか、殊更にウェーバーである必要がどこにあったのかという点に小さな疑問が残った。

20220113

正月休みの気分転換の一環として、板垣竜太『北に渡った言語学者——金壽卿（キムスギョン）1918 - 2000』（人文書院、2021年）という本を読んだ。知られざる大学者の足跡を多大な労苦を払って跡づけ、言語学史や南北朝鮮社会論をはじめ多方面に視線を配り、個人の軌跡と社会史を織りあわせた力作である。多面的な内容をもつ作品であり、私のよく知らない事項も多いため、全体的な紹介や論評をすることはできないが、いくつか印象深かった個所に触れてみたい。

主人公はギリシャ・ラテン・サンスクリットといった古典語や英独仏露はおろかイタリア語、スペイン語、ポルトガル語、デンマーク語もおさめ、東アジアの言語では古典語たる漢文のほか、日・中・蒙・満の各言語も習得していたという語学の天才であり、また京城帝国大学および東京帝国大学大学院で小林英夫（世界で最初にソシュールを翻訳した言語学者）から構造言語学を学び、小林の愛弟子だったという。なお、京城帝国大学は小林のライヴアル的な言語学者たる時枝誠記のほか、同じく言語学の河野六郎、哲学の安部能成、また本書には出てこないが中国思想史の西順蔵、法哲学の尾高朝雄、憲法の清宮四郎、西洋史の高橋幸八郎等々といった錚々たる教授陣を擁しており、これも知の社会史の重要なテーマである。

言語学史に関連しては様々なことが書かれているが、特に関心を引くのは、マールおよび1950年のスターリン論文の受容に関わる部分である（本書では、おそらく田中克彦にならって「マル」と表記されている）。このスターリン論文は、スターリン個人崇拜の絶頂期に書かれ、政治の学問への介入の典型例として悪名高いものだが、内容的には、一見奇妙なことに、それまでマルクス主義言語学を代表すると見なされていたマール学派を批判

して、言語は上部構造ではなく、階級的でもないとして、あたかも「ブルジョア言語学」を復権するかの如き内実を持っていた。そのため、世界各国で「ブルジョア言語学者」たちがこれを歓迎する一方、共産主義者・マルクス主義者たちが当惑するという倒錯した情勢が生じた。金壽卿のそれまでの仕事にはマールの紹介も含まれ、マールの影響があったことは明らかだが、もともと小林英夫に学んでソシュールらの構造言語学を吸収していたから、全面的にマール学説に心酔していたわけではなく、そのように限定的な影響だったからこそ、スターリンのマール学派批判に接しても天地がひっくり返るような衝撃はなくて済んだというのが著者の解釈である。といっても、スターリン論文のインパクトがなかったわけではないが、その受容は特異な形をとった。金壽卿はスターリン論文のうち、「強制的同化に対する巨大な堅忍性と非常な抵抗性」という個所を引用したが、これはスターリン論文への依拠という「国際主義」によりつつ、民族およびその言語の「自主性」を基礎づけようとするものだったという。このあたりは、学問と政治の微妙な関係——単純な外的圧力とか、それをはねのける自立性とかいった図式では尽くされない複雑さを持つ——を描きだすもので、興味が尽きない。

本書の1つの重要なモチーフは、主人公とその家族が朝鮮戦争時の不幸な経緯で北と南に分かれて住むこととなり、離散家族の一事例となったという点にある。長い別離の後に、複雑な事情のもとで交信が復活した経緯、夫の再婚を知らされた妻の受けた深い衝撃、困難を乗り越えた再会などを叙述した個所は息詰まる迫真性をそなえており、胸に熱いものを覚える。

「おわりに」では、本書執筆の背後にあった問題意識が論じられ、著者が克服したいと考えている学問状況・言論状況が数点に分けて述べられている。やや羅列的な観もあるが、どれも重要な点に触れており、特に第四点として、植民地期や冷戦期の抑圧や制約の下に置かれた人々の行為者性（エイジェンシー）や、限界のなかでの創造的な思考を度外視したり、逆にその主体性を無前提に賛美したりする「上」からの視点を克服対象として挙げているのが目についた。

なお、本書に索引はついていないが、その代わりにインターネット上で索引が公開されている。索引というものは丁寧に読もうとする読者にとっては不可欠だが、これを不要と感じる読者もあり、また丁寧につくろうと思えば思うほど相当の頁数をとって、本を厚く（従ってまた定価を高く）するというディレンマがある。その意味で、こういうスタイルは興味深い実験だと感じた。

20220116

最近のカザフスタン情勢を私はきちんとフォローしているわけではなく、大したことを言えるわけではないが、事態がある程度収まるなかで、情報や解説も増えてきたようだ。トカーエフ政権の公式の説明は、事実との合致度についてはもちろん慎重に考えねばならないが、とにかく政権がどのような形で総括したかというのを物語るものとして、一応押さえておく必要があるだろう。とりあえず、次のような点が目にとまった。①当初の燃料価格引き上げ反対運動は平和的なものだったが、そこに暴徒や「テロリスト」が紛れ込んで、大争乱に転化した。②騒乱を外から煽ったのは「イスラーム過激派」だ。③ロシア軍

をはじめとする集団安全保障機構軍は直接には鎮圧に携わず、後方支援のみに当たり、任務完了に伴って速やかに撤退しつつある。④ナザルバーエフは国家安全保障会議議長を解任された。但し、一時流された国外亡命説は間違い。

このような総括の仕方の背後にある思惑を推測するなら、①広範な大衆と「過激派」「テロリスト」を区別することで、前者を敵に回すことを避ける。②外なる敵として「イスラーム過激派」のみを名指すことで、欧米諸国を敵に回すことを避ける。③ロシアへの過度の依存を避ける。④についてはやや複雑だが、長期間政権の座にあったナザルバーエフ前大統領への批判の声が強いことから、彼を切り捨てることで生き延びたいという動機、隠然たる勢力を保っているナザルバーエフおよびその一派の力をそぐことで、自分たちの権力基盤を強化したいという動機、他面、彼を国外に追いやることはかえって危険だという打算などが複合的に作用しているのではないかと思われる。こうした思惑と現実の関係についてはさらに成り行きを見なくてはならないが、とにかく政権の公式態度がどのようなのかは確認しておいてよいのではないか。

20220120

正月休みの読書の続き。ナタン・ミルスタイン＋ソロモン・ヴォルコフ『ロシアから西欧へ——ミルスタイン回想録』（春秋社、2000）。

ナタン・ミルスタインというヴァイオリニストは、私が若かった頃には相当有名だったが、一足先にアメリカ・デビューしたハイフェッツに比べて「二番手」と見なされたせいもあって、今ではそれほど広く記憶されてはいない観がある。本書は、そのミルスタインにソロモン・ヴォルコフが何度もインタビューを重ねて、共著という形で刊行されたものである（原書は1990年）。ヴォルコフといえば、かつて『ショスタコーヴィチの証言』（元来1979年刊行、各種邦訳あり）を作曲家本人の口述筆記という体裁で発表して、その真贋をめぐる国際的大論争を巻き起こした人物である。これに比して、本書の場合、『ショスタコーヴィチの証言』のようなスキャンダル性からは免れているので、安心して読むことができる。推測するなら、アメリカに移住してまもなくの時期のヴォルコフは自分を売り込むために敢えてセンセーショナルリズムに訴えたが、大論争を経た後には既に有名人となり、もう少し手堅い書き方をした方がよいと考えるようになったのかもしれない（彼はショスタコーヴィチに関しても、かつてほどセンセーショナルではないスタイルで、『ショスタコーヴィチとスターリン』を出した）。

それはともかく、本書は、帝政末期のロシアで生まれ、後にヨーロッパおよびアメリカで活躍した音楽家の回想であり、芸術家の視点から見た時代の証言として興味深い作品になっている。簡単に経歴をたどると、ミルスタインは1903年にオデッサで生まれた。ピアニストのホロヴィッツとは同い年、ハイフェッツよりは二歳年下である。子供時代からコンサートでの演奏活動を始めており、ペテルブルクに移住してコンセルヴァトワールでレオポルド・アウアーに師事するようになってからも、「神童」として演奏活動を続けていた。1917年のロシア革命時には14歳だったが、二月革命後のまもない時期にペテルブルクを離れて郷里のオデッサに移住したため、ペテルブルクにおける十月革命について詳しいことを知る機会はなかった。その後しばらくのオデッサでは政権がめまぐるしく変わっ

たが、まだ少年だったミルスタインはとりたてて政治に関与したわけではなかったようだ。革命直後の混乱がある程度収まると、旧ロシア帝国のいくつかの都市で演奏活動をするようになり、1920年代のネップ期にはペテルブルクやモスクワで活発に演奏活動を続けた。ソヴェト政権下で各種の困難はありつつも、それなりに活躍することができており、当時のロシアに一応満足していたことが本書から窺える。

彼は1925年に西欧に拠点を移した。もっとも、その時点ではソヴェト政権に反対しての亡命ということではなく、ソヴェト市民としての外国巡業のような感じだったらしい。しかし、まもなくソヴェト政権の政策に強く反対するようになり、以後、終生にわたって明確に反ソ・反共の立場をとった。亡命ロシア人の中から、プロコフィエフのようにソ連に帰国したり、ストラヴィンスキーのように一時訪問したりする人が現われたときも、それに批判的だった。ゴルバチョフが登場したときも、それほど大きな期待を寄せはせず、醒めた目で見えていた（本書は1990年刊だが、歴史的イベントで触れられているのは1987年末頃までなので、おそらく元来の執筆時期は88年前半あたりと想定される）。なお、本人は1986年に現役演奏家から引退し、92年に死去した。

こういう生涯を送ったミルスタインは、本書で数多くのヴァイオリニスト、ピアニスト、作曲家、歌手、画家、興行師、マネージャー等について、直接的交流に基づいた個性的描写を行っており、そこに本書の魅力がある。最も詳しく描かれているのは、同い年のピアニストでしばしば共演したホロヴィッツである。他方、ヴァイオリンの世界における最大のライバルたるハイフェッツへの言及は、少年時代を除けば、至って乏しい。直接的接触の機会があまりなかったせいなのか、それとも何か書きづらい事情があったのか、気になるところである。それ以外にもたくさんの登場人物が出てくるが、ラフマニノフ、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ショスタコーヴィチ、フルトヴェングラー、トスカニーニ、クライスラー、オISTRAフ、リヒテル、ロストロポーヴィチ、シャガールあたりが特に印象的である。なお、音楽とは関係ない個別のエピソードだが、ホロヴィッツの姉が、「利潤論争」で有名な経済学者リーベルマンの妻になったという話には驚いた。

訳者がどういう人たちかは知らないが、固有名詞の表記や歴史用語の訳語選定には不正確ないし不適切な個所が相当多い。第一義的には音楽愛好家たちを想定読者とした本なのだろうが、歴史に関する本としても読める以上、もう少しこういう点にも配慮してほしい。

20220214

森田童子が作詞家なかにし礼の姪ではないかという噂はかなり以前から根強く流布されていたが、確たる証拠はないという状況が最近まで続いていた。彼女の父親と目される中西正一は、なかにし礼の年の離れた兄で、破天荒な生涯を送った破滅型の人だったらしい。なかにし礼は1998年刊の小説『兄弟』で、兄との確執に満ちた関係を描いたが、あらゆる事実をとことん明らかにしたわけではなく、森田童子のことにも触れなかったようだ（私自身はこの小説は未見）。そのため、2020年になかにし礼が死んだとき、これで森田童子の出生の秘密は永遠に明かされないままになってしまったとブログ上で嘆いた人もいた。ところが、最近になって発見された未発表原稿が毎日新聞出版から刊行されて、長年の噂

がとうとう確証されたということが話題になっている。『血の歌』という本である。私もちょっと気になって、近所の公立図書館で借りだして読んでみたが、やや期待外れの感をいだかされた。未発表原稿ということで秘密の手記かと思ったら、小説の草稿（『兄弟』の準備のために書かれた習作）ということで、分量的にもごく薄いものである。小説である以上、事実とフィクションの境目もはっきりしない。主人公は中西正一という実名で記され（弟も実名）、その娘である歌手の芸名は森谷王子、そのヒット作は「ぼくの失敗」という、わざとらしい仮名で記されているので、これが森田童子と「ぼくたちの失敗」を指していることは疑う余地がない。この小説における中西正一はどうしようもない駄目人間であり、その弟は次々とヒット作を飛ばす有名作詞家ということで、二人は極度に対照的な存在として描かれている。正一は「森谷王子」の実父であるにもかかわらず、ろくに父親らしいことを何もせず、音楽の素養は叔父であるなかにし礼が授けたということになっている。それとは別の話だが、森田童子と同時期にデビューした風吹ジュンをめぐる芸能プロダクション間の引き抜き合戦にまつわるスキャンダルで中西兄弟は共犯関係だったといわれている（私自身はこの件をよく知っているわけではないが、当時は相当有名だったようだし、警察沙汰になったとのことなので、それなりの証拠は残っているはず）。その件についても本書は何も触れていない。小説で書けることには限界があるし、なかにし礼の兄に対する感情がここに書かれたものに尽きるとは断定できないが、それにしても自分にとって都合の悪いことは伏せて、兄だけを一方的に悪者扱いする書き方になっているという印象は否めない。その意味で、後味のよい本ではない。

作品の中に、次のようなセリフが出てくる。[プロデューサー]「森谷王子が、なかにし礼の姪ってことを当分は伏せておきたいの。なかにし礼は売れ過ぎちゃって、どこか体制的な匂いがするじゃない。ちょっと反体制的というか、非体制的な姿勢で、森谷王子をやってみたいのよ」。[なかにし礼]「アングラでマイナーなところから出発させたいんだ」。確かに森田童子にはこういうイメージが付きまっていた。だが、それ自体が叔父やプロデューサーの打算的な売り出し戦略の産物だったとしたら、何かやりきれない気がする。敢えて森田童子本人の事情を推量するなら、関係者たちのこういう思惑や販売戦略によってイメージをつくりあげられ、もみくちゃにされながら、必死に生きていたのかもしれない。

20220218

ここしばらくの間、中国関係の本を何冊か続けて読んでいた。益尾千佐子『中国政治外交の転換点』（東京大学出版会、2010年）、同『中国の行動原理』（中公新書、2019年）、三宅康之『中国・改革開放の政治経済学』（ミネルヴァ書房、2006年）、益尾・青山・三船・趙『中国外交史』（東京大学出版会、2017年）、佐橋亮『米中対立』（中公新書、2021年）、矢吹晋『鄧小平』（講談社現代新書、1993年）、エズラ・ヴォーゲル『現代中国の父——鄧小平』上下（日本経済新聞出版社、2013年）。そのほか、少し前にさかのぼるが、高原明生・前田宏子『開発主義の時代へ1972－2014（シリーズ中国現代史⑤）』（岩波新書、2014年）、矢吹晋『〈中国の時代〉の越え方』（白水社、2020年）、梶谷懐・高口康太『幸福な監視国家・中国』（NHK出版新書、2019年）なども読んだ。

私の若い頃には、中ソ比較というのは多くの人の関心を引きつけるテーマだった。中国とソ連がともに巨大な社会主義国でありながら、その内実はかなり異なっており、両国の間に激しい対立・論争があることから、それをどのように理解するかが大勢の人にとっての関心事だったのは自然である。もっとも、当時の議論にはしばしば政治的・イデオロギー的なバイアスがつきまわっており、冷静で多面的な比較研究が確立していたわけではないが、そのような方向を目指す努力もある程度積み重ねられつつあった。そうした努力の最後ともいべき共同研究の産物である近藤邦康・和田春樹編『ペレストロイカと改革・開放——中ソ比較分析』（東京大学出版会、1993年）は、私も参加したものだが、タイトルに示されるように両国がそれぞれに「社会主義改革」を目指しているかに見えた1980年代後半に、両国の歴史、経済、政治と法、民族と国家構造といった諸側面をできるだけシステムティックに比較しようと試みたものである。ところが、共同研究を進めている最中に天安門事件やソ連解体が生じて、「改革」の前進どころか中断や逆行が懸念されるような状況になり、そうした事態を咀嚼する時間的余裕なしに書物がとりまとめられたため、この本は更なる研究の礎となるというよりも、単純に過去の作品となってしまった観がある。それから約30年が過ぎる間に、中国への関心は急速に増大して各種の中国論が花盛りとなる一方、ソ連への関心は急落し、少数の専門家以外の人たちの注目を引くことはほとんどなくなっている。今回読んだ一連の著作は異なった個性を持つ多様な作品であり、それぞれに学ぶところがあったが、概していってソ連への関心を感じさせる個所はあまり多くない。断片的に「ソ連と違って中国はこうだ」というようなことが書かれる場合、そこにおけるソ連イメージはわりと皮相なものにとどまっているケースが多い。かつて盛んだった中ソ比較研究が十分な成果を生まなかった上に、その後新しい比較論が（一部の例外を除き）現われていない以上、それもやむを得ないことかもしれない。最近では、現代の中国とロシアを並列してどちらも権威主義国家であり、侵略的・好戦的だとする議論も多いが、その多くは単なる印象論にとどまっている観がある。こういう状況の中で、新たな比較論がどのようにして構築できるのか、確たる展望があるわけではないが、①両国がそれぞれに独自の「社会主義改革」に踏み出そうとする以前の、いわば古典的な体制に関する比較、②1980年代前後の時期の両国における「改革開放」「ペレストロイカ」の進行過程（質的変容や挫折の要素を含む）に関する比較、③現代の中国とロシア・旧ソ連諸国に関する比較という諸局面に分けて、それぞれ多角的かつシステムティックに進めていく必要があるだろう（①のうちの民族幹部人事については、先駆的な業績として、熊倉潤『民族自決と民族団結——ソ連と中国の民族エリート』東京大学出版会、2020年がある）。

（追記）。上記の近藤・和田共編著よりも後に現われた中ソ・中ロ比較の試みのうち、私も関与したものとして、加々美光行・緒方康両氏との座談会（愛知大学『中国21』第14号、2002年）および北大スラブ研究センター主催のシンポジウム（唐亮編『ユーラシア地域大国の政治比較』北海道大学、2010年）がある。それぞれに面白い企画だったが、その後継続的に発展してはいないのではないかという気がする。後者のシンポジウムで提起された「地域大国」という概念（普遍主義的イデオロギーでもって全世界を改造しようとする「世界革命」論とは異なるが、ある広がりを持つ「地域」で「大国」であろうとする）は、ポスト社会主義時代のロシアや中国（またトルコやインドなども）を考える上で面白い論点となるのではないかという気がする。

20220222

一昨日、冷戦研究会で吉留公太『ドイツ統一とアメリカ外交』（晃洋書房、2021年）の合評会（例によってオンライン方式）があった。司会は山本健氏で、著者自身による基調報告の後、板橋拓己、藤澤潤両氏から詳しいコメントがあった（以下、敬称略）。

私は吉留の仕事（本書に先行する論文を含む）に多大の刺激を受け、恩恵をこうむっていただいたので、大きな関心と期待をもって出席した。吉留の主張はいくつかの要素からなるが、特に大きな位置を占めているのは、冷戦終焉は単一の過程ではなく、そこには勝敗区分的な性格と東西融和的な性格とがあったこと、そして言説のレベルでは後者もかなり重視されたものの、現実には制度化されたのは前者だったという指摘である。これは私の冷戦終焉観とほぼ合致するもので、大いに力づけられた。アメリカの外交担当者のうちでは、ベーカー國務長官が後者を重視したのに対し、スコウクロフト大統領補佐官が前者の主唱者であり、ブッシュは両義的だった——吉留はこれを「二枚舌」と形容——という指摘も興味深かった。

具体的な論点としては、先ず、有名な「一インチ」発言をめぐる解釈論争がある。NATOの軍事管轄領域が一インチも東に移動することはないというベーカー発言は「約束」だったのか否かというのは、現在のウクライナ危機をめぐる改めて蒸し返されているアクチュアルな論点である。研究史を振り返るなら、クラマー、サロッチ、シュポーア、マトロック、シフリンソンらがそれぞれに独自の解釈を提出してきた。「約束などなかった」とする急先鋒はクラマーであり、彼の議論は現在の国際緊張のなかで「ロシアの主張は嘘だ」という主張の論拠とされている。他の論者たちも（シフリンソンを除き）、正式の約束はなかったという点では一致しているが、そう解釈したくなるような示唆を与えた——そのことが後のロシアに「欺された」という感覚をもたらした——という点をむしろ重視している。実は、ホワイトハウスでは早い段階でベーカー発言は否定されていたのだが、吉留報告によれば、そのことはソ連に伝達されなかった。とするなら、ゴルバチョフがベーカー発言は生きてると信じたとしてもおかしくない（もっとも、これは2月段階のことであり、ゴルバチョフが統一ドイツのNATO帰属を認めたのは、その後の短期的変転に満ちた経緯——特に重要なのは3月の東ドイツ議会選挙——を通してのこと）。なお、これとからんで、当時問題となっていたのは旧東ドイツ領だけか、それとも中東欧諸国も念頭におかれていたのかという論争があるが（クラマーは前者の立場）、吉留報告は、当時既に中東欧諸国についてもある程度の議論が始まっていたことを原資料に基づいて論証した。

もう一つの論点は、1990年7月のNATOロンドン宣言がどの程度の効果を発揮したかという問題に関わる。吉留によれば、ゴルバチョフが統一ドイツのNATO帰属を認めた理由として、密約説・買収説・ロンドン宣言重視説という三通りの解釈があるが、第3の説が最も無難であるため、この考えがわりと広まっているという。しかし、ロンドン宣言を仔細に分析すると、それほどソ連に歩み寄ったものになってはいない。にもかかわらず、この説が流布している1つの理由として、シェワルナゼの回想がロンドン宣言を肯定的に評価していることが挙げられるが、この回想がどこまでソ連の一般的傾向を代表している



のかという疑問を吉留は提出した（私は当日の発言で、シェワルナゼの回想——邦訳のある1991年の著書だけでなく、ドイツ語で2007年、ロシア語で2009年に出たもっと厚い本も含めて——における個人的バイアスを指摘して、あまりこれをソ連の一般的見解と見ない方がよいのではないかという考えを述べた）。

吉留は更に、ドイツ統一に関して勝敗区分的発想が優位を確立した後の新しい展開として湾岸危機を挙げ、これを契機に東西融和的言説が再浮上したことを指摘した。これは新鮮な指摘であり、私も蒙を啓かれた。特に、9月のヘルシンキ首脳会談で、それまで「冷戦終結」を口にしなかったブッシュがとうとうそのように発言したという点は重要である。もっとも、これがどの程度の重みを持ち、どの程度持続したのかという点は更なる検討を要する。11月のパリ会談、翌年のワルシャワ条約機構解散、そしてソ連解体前夜のマドリッド会議などへといたる過程まで含めて、もっと広い角度からの検討が必要とされるだろう。

二人の評者のうち、板橋はドイツ側、藤澤はソ連・東欧側からのコメントを述べた。前者からはいつものように多くのことを教えられた。藤澤のコメントは、大筋では私の考えと合致するが、ところどころで力点の置き方やニュアンスの微妙な違いがあり、秘かな塩川批判があるのかもしれない。それは大いに歓迎するところだが、現段階ではまだそれがどういう風に結実するのかが見えない気がした。事前に配布されたレジュメに加えて、当日、新たな補足ペーパーが配布されたが、そこで紹介された2点の資料は、いずれも私が旧著『歴史の中のロシア革命とソ連』のなかで既に紹介したものであって、特に新味のあるものではない。2つの資料のうち、マルタ会談直後のワルシャワ条約機構首脳会談におけるゴルバチョフ発言は、吉留報告とも重なるもので、吉留も藤澤もともにゴルバチョフがブッシュとの不一致について語った個所を重視していた。そういう面があるのは確かだが、当該演説を全体として読むなら、むしろゴルバチョフはブッシュとの合意形成を高く評価し、ただアメリカのなかにはまだ冷戦思考を脱していない勢力がいてブッシュに圧力をかけているのだ——吉留風にいうなら、ブッシュは東西融和論に近づいたが、アメリカには勝敗区分論者もまだいる——という認識を示している。この認識がどこまで妥当か、またゴルバチョフは本気でそう考えていたのか、それともこの発言は一種のレトリックに過ぎず、内心では別の認識をいただいていたのかといった問題が残るが、とにかくマルタ会談直後のゴルバチョフ発言はこのような形で提示されたと解釈すべきだというのが私の見方である。

主題が私の関心事と深く関わるために、我田引水的なまとめ方になってしまったが、とにかく刺激に富んだ興味深い研究会だった。

20220226

10年ほど前に書いた「E・H・カーの国際政治思想」という論文の中で、私は冷戦期のカーが、ソ連の公式イデオロギーを信じたわけでないのはもとより、文字通りの意味で「親ソ的」だったわけでもないが、あたかも「親ソ的」であるかに見える態度をとった——実際、しばしば彼はそのようなレッテルを貼られた——ことを取り上げて、おおよ次のように論じた。おそらく彼は、当時の欧米における主流的言論状況があまりにも一方に偏って

いることを念頭において、ソ連非難の行き過ぎに歯止めをかけることでバランスをとろうとしたのだろう。もっとも、バランスをとるといのは難しいもので、自分では「中庸」のつもりでも、主流とは逆の方向に行き過ぎてしまうおそれもあり、これはきわどい綱渡りだ。アナロジーをするなら、凶悪犯罪の容疑で起訴されている被告を、無実と信じるからではなく、「どのような被告であれ、公正な裁判を受ける権利がある」という信念から弁護する弁護士の状況が想起される。これ自体は法曹関係者としては当然の考えとも言えるが、場合によっては、正当な弁護の域を超えた過度の擁護論として非難される——また、無意識のうちに実際にそうになってしまう——というおそれもつきまとう。各種の「悪」を理解しようと努めることは認識者としては当然のことだが、理解することが同情や免責につながりかねないという疑念をどうやって払拭するかは困難な問題だ。なお、1968年にワルシャワ条約機構軍がプラハに侵攻したとき、既に老境に達していたカーは公けの発言はしなかったが、ハスラムの伝記に引用されている私信によれば、非常にグルーミーな気分だったようだ（拙著『民族浄化・人道的介入・新しい冷戦』（有志舎、2011年）の第九章）。

この旧稿を思い出したのは、いうまでもなく、ここ数日の出来事と関係している。各種の悪を理解したい——それが同情論や免責論と混同されるおそれを意識しつつも、何とかしてそれと一線を画して——というのが、この間の私の一貫した問題意識だった（これは何もロシアには限られず、日本であれ、アメリカであれ、その他どの国についてであれ、また国とは限らず様々な個人についても、すべて同様）。ここ数日の事態は、問題状況を一層深刻かつ困難なものにしてしまった。晩年のカーがグルーミーな心境にたどり着いたことに共感を覚えつつ、ひたすら悲しい思いがする。とはいえ、ただ悲しみにひたっていても何にもならない。そうした沈鬱な思いをかかえながら、目を凝らして事態の成り行きを見つめ続けようと試みるほかない。

20220316

昨日、和田春樹氏の呼びかけで「ロシアのウクライナ侵攻を一日でも早く止めるために：日本は何をなすべきか」と題するオンライン討論会が開かれた。切迫した状況で緊急に準備されたため、やむを得ないことではあるが、どういう趣旨の、何を狙った催しなのか、最初のうちあまりはつきりせず、ひょっとして何らかの「統一見解」らしきものの形成に強引に巻き込まれるのではないかという疑念もあって、私自身がどういう形で参加すべきかについて大分迷いがあった。そういう事情があったため、自分の発言の冒頭で、「この会の位置づけとして、何らかの統一見解なり方針なりを出す場と位置づける考え方もあるかもしれないが、私自身はそうではなく、あくまでも各人各様の考えや意見を述べあう場と考えたい」と述べ、限定された角度からの発言を行なった。その内容は、先にホームページ上に公表した文章を多少アレンジしたものなので、ここでは繰り返さない。あくまでも個人的な思いだということを強調したのは、私の体質としてペシミスティックな観測に傾きやすいところがあるため、そういう暗い予測を大勢の人に共有してもらいたいと思うわけではないという感覚があった（最も暗い予感、仮にプーチン体制を打倒することができたとしても、その後に来るのは平和・自由・民主主義を基調とする明るい未来

などではなく、新たな騒乱の時代（ロシア史でいうスムータ）かもしれないということ）。とはいえ、和田氏の話を知っているうちに、彼の狙いがだんだん分かってきて、「自分はそれと同じではない」と突っ張る必要もないような気がしてきた。彼は市民運動に携わる人にしては珍しく、現実政治的な成果をあげるということを重視する人であり、そのため原理原則論にこだわるよりも、現に政治に携わっている人たちをどう説得するかを重視する傾向がある。原理原則論は大勢の人たちがそれぞれに論じているが、それはたいていの場合「犬の遠吠え」であって、現下の戦争を止めるには役立たない。それよりも、日本の政府（直接的には外務省）やロシア大使館に呼びかけて、政治家や外交官が受け入れやすいような形で論を組み立てて、停戦の仲裁を訴える方がよいというのが彼の狙いのようにだった。そういう呼びかけにどれほどの効果があるかは疑わしいが、知識人アピールなどの類いがいくら高論卓説を説いても現実政治を動かす上では全く無力なのに比べれば、かろうじて「ひょっとしたら」程度の実効性を期待するということなのだろう。すぐにでもキエフ総攻撃があるかもしれないという状況の中で、何が何でもそれを止めようと思うなら、いくら可能性が低くてもとにかく試みるしかないという考えは理解できる。私自身は、どちらかといえばペシミズムに傾きやすい体質だとはいえ、暗い予感が現実化することを望んでいるわけではないので、かすかな可能性であっても賭けるべきだという考えには賛同できると考えるに至った（和田氏自身は、私よりも成功可能性を大きめに見積もっているのかもしれないが）。今日公表された声明の文面は、人によっては各種の疑問・批判・異論をいただくだろうし、私も躊躇いが無いわけではない。ただ、こういう状況の中でとにかく微かな期待に賭けてみるしかないという和田さんの熱意に打たれて、日頃の私の行動様式からは異例なことになるが、あえて名を連ねることにした。

20220326

先日亡くなった西尾勝さん（非礼かもしれないが、ここでは「さん」づけで呼ばせていただく）は、私とは専門分野が相当隔たっているにもかかわらず、わりと身近で、いわば「親しい先輩」だというような感覚をいただいていた。私の師に当たる溪内謙さんはもともと辻清明門下の行政学者として出発したから、二人は同門の兄弟弟子だった（辻清明還暦記念論集『現代行政と官僚制』上下、東京大学出版会、1974年は、溪内謙・阿利莫二・井出嘉憲・西尾勝編となっている）。溪内さんは東大法学部で「外様」意識をいただいていた、そんな彼が純然たる余所者である私を呼ぶに当たっては、内心いろいろと心配をかかえ、西尾さんによく相談していたという話を後で聞いた。私が赴任したときには、真っ先に「法学部の内部事情については、何でも西尾君に聞くように」と言われた。実際、西尾さんは穏やかな顔で、あれこれ配慮してくれた。そうした人間関係的なこととは別に、行政学という分野は、政治学のサブディシプリンのうちソ連研究に生かしやすい要素がわりと大きいという気がして、西尾さんのいくつかの著作は結構真面目に読んだ。ある時期以降、西尾さんは地方分権改革に情熱を燃やし、現実の制度改革でも大きな役割を果たした。もともと、「平成の大合併」はあまり意図通りのものとはならなかったようで、西尾さんは苦渋をにじませながらそれを振り返っているように見受けられた。それでも、日本に地方自治を根付かせることへの情熱はその後もずっと持続していたようだ。ここしばらくは顔を

合わせる機会もほとんどなくなり、近況も知るところがなかったので、病気だということも知らず、突然の訃報はショックだった。ウクライナ戦争が勃発して、世界全体が暗い方向に向かう情勢を病床でどのような思いで見つめていたのだろうか。安らかに眠ることができていればよいのだが。